

学会ハイライト

第80回日本皮膚科学会東京支部学術大会 を終えて

(2017年2月11日(土)、12日(日)、パシフィコ横浜会議センター)

相原 道子

横浜市立大学医学研究科環境免疫病態皮膚科学教授

はじめに

2017年2月11日(土)、12日(日)の両日、横浜みなとみらいのパシフィコ横浜会議センターにて第80回日本皮膚科学会東京支部学術大会を開催させていただきました。日本皮膚科学会に存在する4つの支部(東部、東京、中部、西部)の中の1つの支部会ではありますが、例年、全国から皮膚科医が集まり、支部総会としてはもっとも大きな会となります。本年は11日の土曜日が祝日であり、一般演題も148演題と多くの登録をいただきました。また両日ともに前日の雪模様とは打って変わって晴天に恵まれたことも幸いし、総数2,765名と、本学術大会としては過去最高のご参加をいただく盛会となりました。

ご参加いただきました会員の皆様や各講演の講師や座長の皆様に、厚く御礼申し上げます。

本大会を開催するにあたって目指した 学術大会のあり方

本学術大会ではテーマを「飛翔する皮膚科学—より高く、より早く」とし、加速する医学の進歩とともに発展する皮膚科学の現在と未来を実感していただきたいとの思いを込めました。また、さまざまなキャリアの会員にとって学びと交流と発表の場になる学術大会を目指しました。そこで、シニアレジデント、専門医試験を受験する直前の医師、若手研究者、大学教員、開業医の皆様それぞ

れにとって興味深いプログラムを並列で並べてみました。特別講演では最先端の医学研究を担う研究者に、教育講演はその分野のエキスパートにご講演をいただき、シンポジウムには現在臨床や研究で活躍の中堅・若手医師を加えました。また、担当した横浜市立大学皮膚科学教室の研究テーマの1つであるアレルギー分野のセッションとして、アレルギー検査の教育プログラムやIgE報告50周年記念シンポジウムを企画しました。以上は、参加者が学会場から出たくなるような会になればと願って準備した次第です。残念ながらご参加いただけなかった方や、並列会場で聞けなかった講演については前回の79回同様学会の終了後にwebで閲覧できるようにしました。なお、今回、持ち歩く労を少しでも軽減できればと思い、プログラム・抄録集の軽量化に努めました。表紙の雲のデザインのようにできるだけ軽くかつ読みやすく、しかもメモが書き込めるような余白の多いものにしました。

また、本学術大会は80回という節目の会でもあることから、東京支部に所属する各教室を紹介するスライドを作成していただき、講演会場の演題の合間や休憩スペースで供覧しました。各教室とも少ない枚数で内容の詰まったスライドを作成していただき、感謝いたします。同じ東京支部に所属していても他の大学のことは知らないことが多いことが改めて認識され、支部内の大学の相互理解に一役買ったのではないかと考えています。学



図1 招待講演のカナダトロント大学 Neil H. Shear教授.

会終了後にはすべての大学の内容が入ったCDを、ご協力いただいた教室や希望者にお配りいたしました。

本学術大会の企画内容

いずれの講演も素晴らしい内容で、大変興味深いものでした。その内容を以下にまとめてご紹介いたします。

1. 招待講演

われわれの教室と水疱症や薬疹の臨床研究で交流のあるカナダのトロント大学皮膚科のNeil H. Shear教授をお招きし、水疱症の最新治療についてご講演いただきました(図1)。自己免疫性水疱症治療において、ステロイドやシクロスポリンなどによる免疫抑制療法が効果不十分な場合のリツキシマブ(抗CD20抗体)の有用性とその使い方について解説されました。また、ocular pemphigoid治療のむずかしさについても症例を提示しながら解説され、興味深い内容でした。

2. 特別講演

特別講演は皮膚科に近い分野の先端的研究を3題企画しました。

特別講演1では本年1月スウェーデン王立科学アカデミーによるクラフォード賞を受賞された大阪大学免疫学フロンティア研究センター実験免疫学講座の坂口志文教授をお招きしました。「免疫自己寛容と自己免疫疾患」と題して自己反応性のT細胞の発生と自己免疫病における臓器特異性の決定機構について、ご講演いただきました(図2)。坂口先生は皮膚科関係の学会でも以前から多数の講演をされていますが、最新の貴重なデータを加えてご発表いただきました。

特別講演2では横浜市立大学臓器再生医学講座の谷口英樹教授に、最近マスコミでも頻繁に取り上げられる「iPS細胞を用いたヒト組織の三次元的再構成」について、ご講演いただきました(図3)。肝臓に始まり、膵臓や腎臓の再構成の可能性も提示され、その臨床応用について、iPS細胞由来肝芽の大量調整の現場を示されながら臨床応用に向けての最新情報をご提供いただきました。

特別講演3では日本医科大学アレルギー・膠原病内科学分野の桑名正隆教授に「Biologics 時代の光と影」と題して、進歩の著しい分子標的薬の開発経緯や恩恵、Biologicsの免疫原性および免疫学的



図2 特別講演1の坂口志文教授。

副作用といった問題点についてご講演いただきました。今後さらに分子標的薬の開発が進む中で、未来に向けた多くのメッセージが出されました。

3. 特別企画

2016年は皮膚科とも関係の深いIgEについての石坂先生ご夫妻による初めての論文発表50周年に当たるため、IgE報告50周年記念シンポジウムを企画しました。石坂ご夫妻と親交がある日本アレルギー学会の斎藤博久理事長からIgE発見の歴史の紹介があり、なぜ、ノーベル賞の対象にされな

いかという裏話も含め、ご夫妻のご苦労について思いをはせる貴重な時間になりました。それに引き続いてアトピー性皮膚炎、食物アレルギー、蕁麻疹におけるIgEの関与について、最新の知見をそれぞれのエキスパートが講演しました。2日目の午後であったにもかかわらず多くの参加者があり、ご夫妻への敬意の深さと皮膚科との関連の深さを改めて感じました。

4. 教育講演

教育講演は従来のアップデートシリーズとは異なり、十分に講演が聴けるよう講演時間を40～45分とって、幅広い分野の7演題を企画しました。アトピー性皮膚炎の新規バイオマーカー、血管炎の診断、脱毛治療、IgG4関連疾患、小児の母斑と腫瘍、皮膚疾患と心理社会的要因、そして横浜市立大学皮膚科学教室の研究テーマの1つであったハンセン病を含む皮膚抗酸菌症について、それぞれ知見の紹介にとどまらない深く掘り下げた内容のご講演をいただきました。とくに戸倉教授のIgG4関連疾患の講演会場は盛況で、この新しい疾患概念に対する関心の高さをうかがわせました。

6. シンポジウム

前記の特別シンポジウムのほかに、基礎研究、



図3 特別講演2の谷口英樹教授。

悪性腫瘍、自己免疫性水疱症やアトピー性皮膚炎、膠原病・血管炎、薬剤性皮膚障害といった免疫・アレルギー関連、そのほかヘルペス感染症、小児皮膚病、フットケアと合わせて8つのシンポジウムが行われました。「皮膚疾患病態研究のTopics」では研究皮膚科学会の日本語版さながらに新進気鋭の研究者による最近の研究内容について興味深い発表があり、熱のこもったディスカッションが行われました。悪性腫瘍のシンポジウムでは最近開発がめざましい分子標的薬によるがん免疫療法の効果とそれによるさまざまな障害や新規バイオマーカーについての講演があり、新たな展望が示されました。

7. 教育プログラム

専門医を目指す皮膚科医歴4～5年目の若手医師を対象とした研修プログラムを、アレルギー検査、画像検査、皮膚病理と3つ企画しました。とくに教育プログラム1の「皮膚アレルギー・過敏症検査入門」は薬疹、接触皮膚炎、即時型アレルギー、金属アレルギーの検査について実践的な内容を重視したこれまでにない企画であり、会場に入りきれないほどの盛況で急遽会場外にモニターをセットすることになりました。病理組織学とダーモスコピーは総会や各支部総会の教育プログラムに必須の内容ですが、それに加えて日常診療の場で必要とされている診療技術の教育プログラムを今後も充実していくことが重要と考えます。

8. 共催セミナー

アトピー性皮膚炎のスポンサードシンポジウムのほか26の共催セミナーが行われました。近年の傾向として乾癬治療のセミナーがもっとも多く、レーザー治療や痤瘡治療がそれに次ぎました。モーニングセミナーやランチョンセミナーは同時に開催されるため、同じ乾癬のテーマでも演者の人気と講演内容が競われますが、初日はすべての会場で、2日もほぼすべての会場で満席となり大盛況でした。

おわりに

プログラムを組むにあたりこれまでと違ったことは、数年前から加わった専門指導医講習会のほかに、東京支部企画研修講習会を2日間の会期中で行わなければならなくなったことです。それによる時間的・場所的制約が加わり、参加したいプログラムに十分参加できなかった会員がおられたことが危惧されました。

また、多数の皆様にご参加いただいたことを感謝申し上げる一方、想定を遙かに超えた参加人数であったことからご不便をおかけしたことも多々あったかと存じます。ご参加いただきました皆様に行き届きをお詫び申し上げます。

最後になりましたが、本学会の開催にご協力いただきました神奈川県皮膚科医会や横浜市皮膚科医会の皆様ならびに日本皮膚科学会の学会運営事務局の方々に、この場を借りまして厚く御礼申し上げます。